



## 19、いよいよ多久へ

——多久へ来たのは平成3年4月ですか。最初に住んだのはどこですか。

多久の皆さんの尽力でこのようになりましたので、最初から多久に住もうと決めていました。しかし、多久のことは何もわからないので、先に知り合いになっていた大平庵の木下社長さんをお願いして、家賃は安いところでアパートを探してもらいました。そこが中多久のアパートでした。コンクリートの2階建てで、以前は炭鉱の社宅であつたらしく当時はオーナーの馬場さんが1階に住んでいて、2階が私の部屋でした。

——福岡から多久ではとまどうことも多かったでしょう。

そうですね。しかし、すぐ傍に住んでおられた中島重吉さん（当時市役所勤務の人）が中多久での生活のことなどいろいろと教えてくれました。また、近所の人たちにも紹介してくれたり、大変お世話になりました。最初ですから大変助かりました。

——中多久からだどこへ行くにも歩かなければならなかったでしょう。

そうです。多久へ来てからも、趙国良さんたちとの演奏活動は続けていました。福岡へ出かけることも多かった。バスセンターまで歩いて行きます。演奏会の時は重い楽器（楊琴）を抱えて遠いバスセンターまで歩いたことも何度もあります。汗びっしょりです。当時は、タクシーを呼ぶお金ももったいなかった。足がないと大変不便だということを実感しました。

このようなこともあって、私は今後半年の間（10月まで）に達成したい目標を二つ決めました。一つは、家族を中国から呼ぶこと。二つ目は、なんとか生活が安定したら車の免許を取ること。この目標を決めて日々頑張りました。

——多久に来て、早速目標を立てましたね。まず、第一の目標はどのように進みましたか。

家族を呼んで滞在させるためには、やはり日本人の身元引受保証人が必要です。私はその当時まだ日本語が十分ではなく、自分の気持ちなどをうまく伝えることができなかった。そこで私のことを最初から知っておられる湯川さんに相談をしました。湯川さんは、快く二人（王艶さん・長男の英傑くん）の保証人を引き受けてくれました。これで家族を呼べるようになったのです。中国の方でも来るためにはいろいろと準備があつて、やっと平成3年10月に来ることができました。このようにして家族三人の暮らしが多久で始まったのです。

——第一の念願がかなってよかったですね。子どもさんは大きくなつていましてしょう。

8歳になっていました。小学校3年になったばかりでした。中国の学校はすべて9月が新学期です。10月に日本へ来ましたから、中国では3年生になったばかりの時です。

こちらでもすぐ学校に入れなければなりません。言葉が一番問題でしたが、野方さんを通して教育委員会へ転入依頼を出しました。中国では3年生になっていましたが、こちらでは北部小学校の2年生のクラスへ編入させてもらいました。

## 20、運転免許へ挑戦

——家族を迎えて多久での生活が始まったわけですが、二つ目の目標である運転免許の方はどうになりましたか。

家族と暮らせるようになって、私もやっと安心できました。運転免許のことはずっと頭にありました。ちょうどそのころ、同じ中多久に住んでいる西村さん（現資料館館長）からいい話を聞きました。大町自動車学校には中国語が少しわかる先生が一人いますよと。私が一番心配していたのはやはり言葉がわかるかどうかということでした。すぐ西村さんに頼んで、大町自動車学校を紹介してもらい、その中国語が少しわかる先生の担当にしてもらうことができました。12月ごろだったと思います。

大町まではちょっと遠いですが、送迎バスがあるので安心でした。言葉のハンディーはあるけれど、毎日一生懸命頑張りました。マニュアル車とオートマ車がありましたが、私はマニュアル車を希望しました。当時は、先生の指示する言葉も私には難しかったですね。

王艶さんも私のことを心配して、いろいろと応援してくれました。例えば、餃子をたくさん作ってくれて、それを私が学校へ持って行き、先生たちに食べてもらったりしました。本場中国の餃子は皮が厚いと、大変好評でした。学校中の先生たちに食べてもらったと思います。

2ヶ月ほどでほとんどの学習は終わりました。この時期は高校生の教習生も多く、遊び半分で受講している感じの者もありました。一番難しいのはセンターでの学科試験だということです。学科試験を合格するには2～3回はかかるだろうと言われました。それだけお金もかかるのです。学校では1回100問の模擬試験を5回受けました。それを全部できれば合格できるということでした。私はその500問を繰り返し繰り返し覚えることをしました。なんとしても合格したかったのです。

3月にセンターでの学科試験がありました。大町自動車学校の同級生もみんな受験に行きました。試験の後、しばらく待つと合格者の発表がありました。私はできたつもりではありましたが、心配でした。なんと合格者名簿の中に私の名前もあったのです。一回で合格とは私も信じられませんでした。大変嬉しかった。一緒に受験した高校生たちの8割近くは不合格だったとのこと。

——言葉も難解だったと思いますが、よく一回で突破できましたね。それだけ真剣に取り組んだからできたのですね。

そうです。あの500問の問題は全部覚える努力をしました。私がここで合格したことは、佐賀県内で多分最初の中国人合格者だろうと言われました。

後で聞いたことですが、私の合格は大町自動車学校でも喜ばれ、学校の模範生としてみんなに伝えられたそうです。趙勇さんのように勉強すればみんなも一発で合格できるのだと。

——二つ目の目標も達成しましたね。免許証は手に入れましたが、車の方はどうしましたか。

私が福岡で通っていた日本語学校の人が、私の免許取得を知って、学校で不要になって廃車しようとしている車があるが使いますかと聞いてきました。古いがまだ走れるとのこと。ただで譲って

いいですよと言われた。親切を感謝して、私は喜んでその車をもらいました。

免許を取っても初心者ですから、運転に慣れるためにこの車は大変役立ちました。ちょっと傷つけたりもしましたが1年近くは乗りました。その車は、最終的には17万キロ以上走っていました。整備工場で次の車検を通すためには部品交換などに必要な金額で、いい中古車を買えると言われました。

次の車をどうするか、王艶さんに相談しました。彼女が言うには、私たちが自分の車を持って自分で運転できる生活など今まで夢にも思わなかった。それができるようになったのだから新しい車を買ってもいいでしょう。なんとか買えるだけのお金があれば。お金がなくなればまた努力すればいいでしょう。王艶さんのこの言葉に励まされて私も新車を買うことを決めました。

日産の当時発売されたばかりの新型ブルーバードに決めました。当時消費税3パーセント含めて198万円でした。これまでの演奏活動で得たお金です。この車もよく走りました。演奏会で広島往復日帰りのこともありました。8～9年間ほど使ったと思います。

## 21、長男 英傑君のこと、そして次男 英初君誕生

——日本の小学校へ編入した長男のことは心配だったでしょう。その後どうでしたか。

その時は8歳でした。趙英傑（えいけつ）といいます。もちろん日本語はなにもわかりません。やっぱりそのことが一番心配でした。長男は言葉はわからずとも毎日学校に通いました。ずっと見ていると、嫌な様子も苦しい様子も見えませんでした。この当時はテレビゲームが盛んな時代で、私も甘かったのでしょう、たくさんゲームを買ってやりました。子どもは下校するとすぐゲームで遊んでいました。4～5ヶ月すると、2～3人の友達を家に連れて来るようになりました。これを見て私も一安心しました。

しばらくして担任の先生が家庭訪問されました。先生は、英傑君は日本語を覚えるのが早い、今ではほぼわかるようになっていきますよと。これで私はまた一安心。この先生（小森先生、現中央小教頭）には大変お世話になりました。またその時の校長先生（尾形善次郎先生）も、放課後には長男を校長室へ呼んで、特別に日本語の指導をしてくれました。そのようにして1年経つと長男の日本語は私よりも上手でペラペラになっていました。驚きました。

そのころになると学校へ行くのが楽しいと言うようになりました。その後、中多久から砂原の中島会館へ住まいが変わりました。ここは緑ヶ丘小の校区ですが教育委員会の配慮で転校せずに、卒業まで北部小で過ごすことができました。

中島会館というのは、元炭鉱主の住まいであったものを多久市に寄贈してもらったもので、多久市の施設として使われていました。平成5年、ここの管理人が空席だという情報を得て、不二見先生などの助力により、王艶さんを住み込みの管理人として雇用してもらうことができました。それによって私たち一家はここに住むことになったのです。平成16年まで11年間ほどここに住んでいました。子どもたちもここで育ちました。ここの一室で毎週、私が講師を務める中国語講座も開かれていました。

ところで、私が長男英傑を通して日本の小学校学校教育について感じたこともたくさんありました。最初に驚いたのは、授業中にトイレに行くのを先生が許していること。中国ではこんなことは

ありえない。授業全体が遊びのような感じであった。中国とは全然様子が違っていた。長男も中国での経験もあるので、日本の学校が楽しいと言う。帰ってからも遊ぶ時間が多い。中国では宿題が大変多くて、遊ぶ時間は少ない。

日本の学校教育のいいところはたくさんあると思う。例えば、ほめながら本人のやる気を促すとか、いろいろとを感じるものはあった。中国では日本に比べてもっと厳しい授業のやり方である。時には強制的な部分もある。日本の小学校の教育にはいくらか不満も感じました。

長男は小学校を終えるころには、もう中国の学校には絶対に帰りたくないと言っていました。

このようにして長男は小学校を卒業して、市立中央中学校へ入学しました。中学校では、新しくできたハンドボール部へ友達も誘って入り、部活動に熱中するようになるのです。

家族を呼び寄せて私たちの生活もなんとか落ち着き、日本での暮らしにもなじんで来ました。中国ではそのころも一人っ子政策で、二人目の子供を産むためには大変な覚悟が要りましたが、日本ではそんなこともなくて、日本は幸せだと思いました。私たちも、もう一人ぐらい子供が欲しいと思いました。できれば女の子が欲しいと思っていました。

そんなときに二人目の子どもが生まれることになったのです。私たちは大変喜びました。しかも病院の先生の見立てでは、女の子のようだとのこと。毎月の検診でも女の子だろうと言われていました。私たちもそのつもりでいました。ところが出産間近の検診では、どうも男の子のようですとのこと。男の子が誕生しました。

平成6年9月4日、私たちの二男誕生です。私たちが日本に来て初めて生まれた子どもだということで、英初（えいはつ）と名付けました。長男英傑とは12歳はなれていて、はからずも二人とも成年（いぬどし）生まれとなりました。

——英初君が加わって、趙勇さん一家にもぎやかになりましたね。家での言葉はどうなっていたのですか。

英初が生まれて3歳ごろまでは、両親とも意識的に中国語で育てました。3歳から保育園へ行きましたが、そこでは日本語、家へ帰って来ると中国語です。保育園で友だちとは日本語で、家に帰ると両親からは中国語です。自分では日本語を早口でしゃべるから母親はよくわからない。私が通訳をして中国語で言う。そんな暮らし方だったから今でも英初は中国語もある程度わかります。

## 22、日本に帰化する

——長男の英傑君は中学校では部活のハンドボール部で活躍していたのですね。

中央中の馬場先生が新しく創部された部活で、長男は友達を誘って遊びの延長のような感じで始めたのです。楽しく練習をしていたようです。練習試合や県大会などよく出かけていました。しかし、試合にはいつも負けてばかりのようでした。3年間練習を続けたのだから当然技術の進歩はあったでしょう。高校進学の際には、ハンドボール部のある、県内や県外の高校の先生から勧誘を受けました。英傑は県内の高校を希望しましたが、私は県外を勧めました。甘えん坊の長男には早く自立をさせたかったからです。最終的には英傑も私の勧めを受け入れて、県外の高校で寮生活することを決断しました。久留米工業大学付属高校（現久留米祐誠高校）に推薦で入学できました。

——中学卒業後、すぐ一人暮らしをさせるのは心配じゃなかったですか。

英傑は親元を離れ久留米で初めての寮生活を始めました。私も初めはどうなることかと少しは心配していました。最初のころは、毎晩のように電話をかけてきていました。そして母親と長く話し

ていました。帰りたいと言うのです。寮の公衆電話からで、母親は電話カードをたくさん買ってやっていた。こんなことが半年も続いたでしょうか。しかしいつの間にか子どもの様子も変わってきました。学校や寮の生活にも慣れてきたらしく、愚痴も言わなくなってきました。休暇で帰ってきたときなどは、寮の生活など詳しく話してくれるようになりました。寮生活の決まりなども自分でこなして努力していることがうかがえました。

私はよかったと思いました。これで甘えん坊からの自立はできたと思いました。久留米にやってよかったと思えるようになりました。

長男の英傑が久留米に行ってからしばらくして、王艶さんも車の免許を取りました。私と同じ大町自動車学校へ通って、私と同じ先生に担当してもらいました。彼女はきちんと日本語を勉強したことがないので、言葉で苦勞しました。センターの学科試験に3回通ってやっと合格。しばらくして、三菱の軽自動車を買いました。

この車は王艶さんとともに大活躍をしました。2～3歳になった次男英初を連れて、久留米まで英傑の試合の応援によく通いました。

——英傑君も頑張っていたのですね。ハンドボール選手としても・・・

そうですね。親としてもいろいろな面で進歩がうかがえるようになりました。ハンドボール選手としても実力をつけて行ったようです。英傑は体格もよく、左利きですから左サイドを任されていました。このチームは九州でも実力ナンバーワンと言われ、全国的にも注目されていました。

2年生のとき、監督の先生との面談で、今後の進路についても相談しました。監督の先生は、今の実力であれば十分大学に推薦できるとのこと。そして大学を卒業した後、日本で就職するのか、それとも中国に帰りますかと訊ねられました。私は、日本で就職させたいと思っていました。英傑は、8歳からずっと日本人の中で、日本語で育ってきました。今では、あんまり中国語もわからない。

監督の先生が言われるには、今の実力で行けば大学卒業後の就職もほぼ保証できる。ただ中国国籍のままだったら少し心配です。そして、日本国籍だったら問題ない。日本国籍をとったらどうですかと。

——趙勇さんが日本へ来てから今までの話を聞いていると、来るべきところにたどり着いた感がありますね。日本帰化は趙勇さんも考えていたことではないのですか。

そうですね。しかし、はっきりと意識して考えたのはこのときからです。夫婦でも話し合いました。そして、私たち両方の両親にも話し、意見を聞きました。両方とも猛反対しました。家族でも何度も話し合いました。王艶さんは少し迷っていました。長男は、日本国籍を切望しています。夫婦の話し合いでは、子どもを守るのは親であり、子どもの希望も叶えてやりたい、子どもの将来を考えて帰化を決断しました。その後、中国の私たちの親たちにも説明し、納得してもらいました。

——いよいよ決断しましたね。この申請手続きは難しかったです。よくやり遂げましたね。

私たちもどのような手続きをしなければならぬのか全く分かりませんでした。まずは佐賀の法務局へ相談に行きました。いろいろな書類とともに、帰化を希望する詳しい理由書を書かねばなりません。これはとても私だけでは難しい。そこで弁護士に相談することにしました。王艶さんと二

人で福岡の弁護士事務所（福岡領事館の近く）を訪ねました。今までにも外国人の帰化手続きを経験したことのある弁護士が相談に乗ってくれました。引き受けてもいいが料金は高いとのことでした。王艶さんと相談をして、高くても依頼することを決めました。

弁護士に理由書を書いてもらうため、私たちの今までの経歴やこれからの思いを詳しく話しました。弁護士はそれを元にして私たち四人、ひとりひとりの理由書を書いてくれたのです。平成11年2月に佐賀法務局へ申請書を提出しました。

そのとき法務局からは、審査判定には早くて一年、遅い場合には二年位はかかるだろうと言われました。更に、この間に日本の法律に違反するようなことがあったらダメになるとのことでした。

一方、中国領事館には中国国籍放棄の手続きとパスポートの返納をしなければならなくて、私たちは、単なる日本在留の資格だけとなったのです。

#### ——判定が出るまでどのくらい待ちましたか。

そう、半年もならないうちに法務局から、家族全員で法務局へ来なさいとの要請状が届きました。帰化の可否は書いてありませんでした。子どもたちにも学校を休ませて、みんなで法務局へ行きました。

局長室に招かれて、局長から重々しい口調で「帰化を許可する」という許可の伝達がありました。この後、別の応接室に移りお茶が出されて、懇談の場が設けられました。ここで局長は初めて笑顔を見せて、「よかったですね。これからは一人の日本人として頑張ってください。あなたは、これからも演奏家として活躍してください。」などと、ねぎらいの言葉をかけてくれました。緊張していた私たちもホッとしました。全てが終わって法務局の外へ出ると、長男の英傑は「バンザイ」と叫び、跳び上がりました。

日本への帰化申請の条件の一つに私たちの名前的问题がありました。私たち家族の姓を日本人風の姓に変えなければならないのです。つまり、私の「趙」と王艶の「王」いう姓を廃して、新しい姓を名乗るのです。（中国では結婚しても両者の姓は変わらない。）

実は、中国在住の王艶さんの父親は中国「易経」占いの専門家です。そこで、私たちの姓をどのような漢字で書いたらいいかを占ってもらいました。その結果は、「8画の漢字」が一番いいとのこと。そこでいろいろ考え、最終的には「中井」に決めました。これと同時に私と王艶さんの「名」も「浩司」（ひろし）と「千愛」（ちえ）に決めました（これも「易経」占いにより）。長男と次男の名は今までと変わらず。

私の名前は「中井浩司」（なかいひろし）となりました。

(2015. 1. 22)